

第 14 回:こころとかたち

教場長 田中仙融

「和敬清寂」

茶の心を表している四文字として、必ずと言ってよいほど、茶道を説明する際に用いられているのではないのでしょうか。

そんな熟語の中の「敬」と云う字について、薬師寺の大谷徹獎様から問いを投げかけられました。最近では敬う心がないと思いませんかと。大谷様は仏像を見ても、手を合わせて拝む人が少ないのだと説明されます。仏像に興味をいだき寺に来訪される方は多いのだそうですが、手を合わせて拝む方は少ないと。

その言葉にはっとさせられました。前会長¹が記した『茶掛けの見方』という本のはじめの部分を思い出したからです。

茶の湯で松永耳庵翁の相伴を前会長がした折のことに触れて、茶席における床に対しての心得を述べている箇所を思い返したのです。

耳庵翁は眼鏡をかけ直し、床前で軸の一言一句を読もうとしているご婦人に対して、「茶席における墨蹟は拝するもので、だた、鑑賞するだけのものではない。云々」と話されたという箇所です。

仏像も鑑賞するものではなく、本来は拝むもの、茶席の床の間に掛けられた軸もまた一字一句を読み取るものではなく、拝してその大意を知り、気韻を汲み取り、用いた亭主の心を受け止めることこそが大切なのだということを改めて気づかされました。

仏像や掛軸に限らず、人や道具の如何にかかわらず今あるということを大切に受け止めて頭を下げる姿勢。これが日本人に受け継がれてきた美しい姿で、茶席の中にも求められた人と人、人と道具とのかわり方なのではないのでしょうか。

平成 27 年 08 月発行 会報「えんじゅ 84 号」掲載

¹ 仙翁前会長のこと